

平成 24 年度研究プロジェクト「アジア（特に南シナ海・インド洋）における安全保障秩序」 分析ペーパー

海洋の安全保障：エアシー・バトルとオフショアコントロール

八木 直人（海上自衛隊幹部学校）

はじめに

米国国防省は 2010 年の『4 年毎の国防見直し(Quadrennial Defense Review)』において、“A2/AD”について言及し、これに対応する「エアシー・バトル(AirSea Battle)」構想を提唱した。この作戦構想の細部内容は必ずしも明らかではないが、米国の軍事戦略が変化の過程にあり、地政学的な脅威への準備がなされつつあることは明白である。本稿では、「エアシー・バトル」構想が生み出されてきた背景や A2/AD の概念を分析し、中国の A2/AD 能力に言及する。さらに、最近の戦略文書から「オフショア・コントロール」—「エアシー・バトル」への批判を含む—の概要について分析する。

1 A2/AD(Anti-Access and Area-Denial)の系譜

冷戦期間中、米国の安全保障体制は、抑止と前方展開を主軸とした軍事戦略を展開し、海外に相当規模の戦力を配備してきた。しかしながら、イラク戦争終了後の 2003 年、米国シンクタンクの戦略予算評価センター（CSBA）のクレピノビッチは、「前方基地の長期的生存が不可能になりつつある」と指摘した。その理由は、第 1 に、前方展開と戦力投射能力が冷戦後の戦略環境によって多大な課題に直面したからであり、その課題とは作戦概念の変化（「駐留」体制～遠征体制）、政治的制約（同盟～有志連合）、地理的要因（基地ネットワークの再編）である。第 2 に、その変化によって、沿岸部や内陸部の敵対勢力は、米国の作戦に抵抗可能となった。つまり、A2/AD 能力が具体的に展開されている。A2(Anti-Access; 「アクセス阻止」)とは「同盟国に対する米国のアクセスを阻止(阻害)すること」を目的とし、AD(Area-Denial 「エリア拒否」)とは「紛争地域における米軍の行動の自由を抑制すること」を目的としている。第 3 は、地域諸国の A2/AD 能力が飛躍的に拡充され、顕在化していることである。例えば、同盟国に対する外交的圧力、対抗部隊の内陸部配備、目標施設の防御強化・聖域の設定、弾道・巡航ミサイルの機動・分散化、航空機のステルス化、ネットワーク攻撃等の可能性である。

2 中国の A2/AD 能力；「ドラゴンの棲家(RAND,2007)」

ランド研究所(RAND)は、2007 年に「ドラゴンの棲家に侵入する(Entering the Dragon's Lair)」を公刊、「中国の A2 概念と能力」を分析し、中国の A2 戦略と米国に対する影響を考察した。この報告書は、中国の A2 能力の形態が米国との紛争を想定している有力な仮説であり、「中国が米中紛争において、米国の軍事作戦に最大の影響を及ぼす方法を検討している」と分析している。中国の A2/AD 能力の特徴は、人民解放軍の「ハイテク状況における局地戦」ドクトリンに示されている。それは中国の軍事的弱点の認識と相対的強点の極

大化によって、敵の弱点を利用する戦略であり、奇襲・先制攻撃が中心である。RAND の分析する中国軍事戦略の特徴は、「ハイテク状況下の局地戦」や「先制・奇襲攻撃」、「直接的対峙の回避」等、米国に対する非対称アプローチに主眼が置かれ、その政治戦略として日米同盟の制限や外交的強制、同盟国の基地の有効性の削減や中国近郊海域での米海軍作戦の妨害が指摘されている。中国の A2/AD 戦略に対しては、(1) 航空基地の防空能力の強化／重要施設周辺のみ사일防衛システムの配備；(2) 特殊部隊への防御の強化／航空基地防衛の多角化；(3) 港湾における海軍艦艇の脆弱性の削減；(4) 指揮管制・通信・コンピュータ・情報・監視・偵察システムの脆弱性の克服；(5) 高高度核爆発効果の抑制・緩和／同盟諸国の能力の向上；(6) 弾道ミ사일防衛の改良等の措置が必要である。

3 「エアシー・バトル」；戦力投射の課題

大陸諸国に最新軍事技術が普及することによって、米国の西太平洋やペルシャ湾へのアクセスは新たな挑戦を受け、そのリスクとコストを軽減する戦略的選択肢が求められる。新たな作戦概念「エアシー・バトル」は、中国やイランの A2/AD 能力を新たな戦略的挑戦と受け止め、米軍の戦力投射能力への挑戦に焦点を当てている。両地域は大陸と海洋の交差領域であり、空軍と海軍だけでなく陸軍や海兵隊を含んだ統合的な作戦構想である。既存の近代戦との作戦環境の相違一例えば人道支援等一を認識し、戦争や戦闘の概念的变化を視野に入れたものである。また、前方基地の脆弱性は米国の抑止的行動を阻止・阻害する要因となり、その非脆弱化も作戦構想の一部に含まれている。米国のインタレストへのアクセスにコストとリスクが負荷される場合、これを排除することが米国の戦略的伝統であった。戦力投射能力の確保と確保は、米国の世界戦略の根幹を成すものである。したがって、「エアシー・バトル」は、米国の戦略的伝統に合致した構想でもある。

4 戦略理論としての「エアシー・バトル」構想

「戦力投射」や「シーパワー」が新たな概念ではないのと同様、歴史的に、海洋諸国は A2/AD の脅威に直面してきた。両大戦のドイツ潜水艦戦やソ連海軍のゴルシコフ戦略は、今日的には“A2”である。ベトナム戦争は民族解放戦線の AD 戦略であろう。したがって、これに対抗する「エアシー・バトル」は、伝統的な戦力投射作戦の文脈に位置している。しかし、A2/AD 脅威は段階的に変化してきている。1990 年代から 2000 年初頭にかけて、A2/AD は「非対称(asymmetric)」脅威であり、ゲリラやテロ、ローテク兵器等が焦点となっていた。現在、大陸からの脅威は必ずしも「非対称」ではなく、局地的には米海軍や同盟国との対等な戦闘能力に拡大している。したがって、「エアシー・バトル」は、通常紛争に備える作戦構想であり、敵勢力の A2/AD 脅威に対応することが安全保障戦略の中心的選択肢になりつつある。最終的には、作戦から安全保障全般にわたる広範な領域を網羅するものとなる。したがって、「エアシー・バトル」は概念上、米国の戦力投射能力の「レコンキスタ(失地回復)」と評価することができる。「エアシー・バトル」という新たな作戦概念

は、大陸勢力によって引き起こされる軍事的挑戦に直面して、米国の戦力投射能力を再評価し、維持することを目的としたものである。

5 「オフショア・コントロール」構想

「オフショア・コントロール」構想とは、エアシー・バトルと共に中国の A2/AD 能力への対応として米国防大学(NDU)の「戦略フォーラム(Strategic Forum)」に発表されたものである。その構想は、エアシー・バトルを「勝利の理論ではなく、兵器システムの戦術的使用に過ぎず、紛争解決への構想ではない」と批判することから開始されている。オフショア・コントロールの目的は、大陸周辺に対する米国の「商業的インタレストへのアクセス」と「同盟国に対する関与の意思・能力の保証」であり、その手段として、中国の軍事行動を抑止し、核エスカレーションを極限化する等の平時の「信頼性」の確保に重点が置かれている。したがって、戦略目標が限定され、エスカレーションの阻止と安定の回復を目指した「防衛的・抑制的」構想と定義することができる。エアシー・バトルと共に、中国の A2/AD 能力に対しては深刻に受け止めているが、同時に、その抑止や再保証を拡大し、事態の急速なエスカレーションを阻止して、経済的損失の極限化や貿易システムの再編、経済的相互依存と政治的対立の解決も視野に入れた現実的な構想である。つまり、「決定的な勝利を目指すのではなく、紛争の解決を準備する」戦略的アプローチが提言されている。

分析の視点 ; 「オフショア」の概念と海洋の安全保障

中国の A2/AD 能力への対抗を模索するエアシー・バトル 構想とオフショア・コントロール構想は、共に、今後の米国の対ユーラシア・東アジア戦略を予測する場合の最適の資料である。特に、両構想ともユーラシア周辺の海洋部分へのアプローチを具体的に記述した点で、周辺部分に位置する米国の同盟国にとって、さらに研究を促進すべき構想である。特に、用語としての「オフショア」は、かつて「オフショア・balancing」として、冷戦後の米国の戦略論議の中で展開されてきた。オフショア・balancingとは、米国の戦略的インタレストはユーラシアでの覇権国の台頭の防止にあるが、大陸における大国間戦争から米国を隔離し、同盟国との「負担分担から負担移動(from Burden Sharing to Burden Shifting)」を模索する均衡の確保を意味するものであった。そのアプローチは、単独覇権的ではなく自己抑制的であり、コストの軽減や海空軍重視、多極世界への対応に適するものと評価されてきた。つまり、「地政学上、海を隔てた”offshore”から大陸間の均衡を図る」戦略である。対テロ戦争終了後、財政問題への対処を余儀なくされる米国では、国防予算の削減とユーラシア周辺地域の不安定というジレンマに対応するため、再び、「選択的関与」や「オフショア」といった概念が提示されつつある。例えば、インド洋を見据えた米国の戦略は、ホルムズ海峡と南シナ海を「インド洋ハイウェイ」のチョークポイントと規定し、このチョークポイントの安定に米国と同盟国が、どのような「公共財」を提供できるかが焦点となっている。ユーラシアの周辺部分に位置し、米国との同盟を堅持してきた

日本にとって、米国の戦略—エアシー・バトルやオフショア・コントロールを問わず—との整合性を図り、伴に地域的公共財を提供可能な体制を構築することが必要となろう。

(参考文献)

Andrew Krepinevich, *Meeting the A2/AD Challenge*, CSBA 2003; Andrew Krepinevich, *Why Air/Sea Battle*, CSBA 2010; Roger Cliff, *Entering the Dragon's Lair*, RAND 2007; C.Layne, “From Preponderance to Offshore Balancing”, ISEC, Summer 1997; Michael Green, *Defining US Indian Ocean Strategy*, TWQ spring 2012; T.X.Hammas, Offshore Control, *Strategic Forum* 278, June 2012. 拙稿 「エアシー・バトルの背景」『海軍校戦略研究』(2011年5月)